

2011年3月11日以降に起こったこと

—その後に人々が求めていること—

地球環境緑蔭塾代表 加納誠

〒226-0015：横浜市緑区三保町 1577-1 Tel&Fax: 045-934-1129

1129makotokano@gmail.com

広島への原爆投下からちょうど3年経った1948年8月6日、朝日新聞大阪本社版は「原爆症完全に消滅」という見出しで、被爆者の診療にあたってきた広島通信病院長の次の談話を紹介した。

「(内科的疾患としての)原爆症は既に消滅した。われわれは爆弾症から解放されているという学問上の事実を確認し、平和記念日を明るく迎えたい」こうした楽観的な記事はこれが初めてではなかった。

～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～

占領期、被爆の惨状を語る報道がメディアから姿を消す一方で、原子力の危険性を実際より小さく見る記事が時折、新聞、雑誌に掲載された。

——以上、朝日新聞東京本社版2011年11月2日記事より

上記は世界で初めて原爆の惨禍を受けた日本の、報道のその後の動きを反省を込めて振り返った記事である。広島、長崎、福島と続く日本の原子力災害の教訓を、犠牲者への鎮魂を込めて、今こそ我々が世界に発信して行かなくてはならないのではないか？

私は2011年3月11日の東日本大震災のNewsを、環境問題国際会議会場である国立沖縄高専の事務棟に在るTVの臨時ニュースで知った。その後の大津波による未曾有の惨事がReal Timeで流されるなか、翌日、緊急実施された福島第一原子力発電所のベント弁開放でも間に合わず、電源喪失・冷却機能麻痺等によって、最も恐れていた水素爆発が起こった。

私は、我が国歴史上かつてない地震・津波・原発事故という3重の大惨事に直面して、慄然と成ると共に、その後の原発事故の報道を細心の注意を持って追いつけた。

それに関する、東京電力、原子力安全保安院、政府当局の会見は、“安全に問題は無い”見解であり、その後も曖昧な報道を延々と聞かされることになったのは全国民が知るところである。しかしその過程で断片的に示された、刻々と変わる原発の客観的状況からは、紙面にはあからさまには表れないものの、実は深刻な状況が生まれつつあることを、私は戦慄と共に思い知らされた。

つまり、原子炉冷却系の主系統のみならず予備系統を含む全ての冷却系の作動不能に加えて、炉内圧力上昇、炉温の異常上昇、周辺放射線濃度の高騰その他、を総合判断すると核燃料のメルトダウンが確実に起こっていると判断した。

私は原子力の専門家では無い。高校物理と大学理工系初年度の物理が解っていれば、誰でも判断出来る事柄であったのでは無いかと思う。もっとも、生徒の高校物理の選択率はせいぜい30%、更にその中から理工系大学に進学する学生は、もっと少ないという憂うべき現状なのだが、それでも報道の裏に潜む真実を予測できた人はかなりいたはずである。

にも拘らず、科学系担当のジャーナリストも含めて、的確な報道を提供していたメディアは少なかった。なかんずく、世に言う“原子力村の科学者・スポークスマン”達はこの期に及んでも、安全神話の枠内からの発言に終始した。

その発言の結果責任は、日本の科学技術リテラシー確立の前途に重大な暗雲をもたらしている。現在、その負の影響は高まりこそすれ、消し去ることが不可能にまで深刻に成った。所謂、原子力村の責任者達はもとより、専門家・科学者の発言に対して、多くの市民、とりわけ乳幼児を抱える母親達の不信感は頂点に達しようとしている。

今日、多くの人々の関心は、「誰の言うことが正しいのか?」「今、本当には何が起きているのか?」「安全な放射能被曝基準は、どれなのか?」「どの食物が安全で、どの地域が安全なのか?」と言った切実な問題に集中している。そして東電・原子力安全保安院・政府当局は勿論のこと、今日までの科学者コミュニティからの情報発信が曖昧で、何を本当に信用して良いか人々が大変な不信感を抱いている。

今こそ現状に危機感を持つ人々・正しい認識を持つ科学者コミュニティが立ち上がり、正しい科学的認識（科学的リテラシー）を基に、復旧・復興への足音を響かせなくてはならない時は無い。真実を人々に伝え、人々に正しい判断力を与えなくてはならない。

今年の世界文化賞を受けた指揮者の小澤征爾が、受賞者会見で「僕の先生達はよく、『知らないことはよくないことだ、罪だ』と書いていました」と切り出し、原発事故について語り始めた。

「僕は、原発は地球を汚さないし安いし、人間が考えた素晴らしい物だと言われ、そう信じていた。それは、知らなかった訳です。前にも事故があったけどピンとこなくて、また起こるとは思っていなかった。要する、本当に知らなかった」

その上で、今年この賞を日本人である自分が受ける意味について、「だから、僕にとって今年是非常に恥ずかしい年。その年に賞を貰うことは、運命だと思っています」と話した。

21世紀の環境科学リテラシー確立に向けた取組み



塾講座



塾勉強会
国際性
教養
技術士育成

座学と実践からほんものの教育を...

地球環境緑蔭塾の挑戦

山口東京理科大学 加納研究室

塾農場
里山活動
竹炭製造



村塾寮
サロン

生ゴミバイオマス



小沢征爾氏の赤裸々な告白に対して、東電・原子力安全保安院・政府・科学者コミュニティは正面から答えなくてはならない。環境科学リテラシーの確立を目指さなくてはならない所以である。

其のための、地味ではあるが大切な動きが始まっている。その中の小さな試みの一端を、今回の講演でお話する。地球環境緑蔭塾のささやかな歩みを捧げたい。

“原子力平和利用スローガン”の裏に潜む危険性に対して、一生を掛けてアンチテーゼを訴え続けた故高木仁三郎博士の、貴重な努力を無にしてはならないのである。